

研究主題 「学習意欲の向上を目指した英語の指導の工夫

－他者と関わりのある活動を通して－

東京都教職員研修センター研修部教育開発課
都立稔ヶ丘高等学校 主任教諭 酒井 友実子

第1 研究のねらい

グローバル化が進展する国際社会を生きる生徒たちには、外国語を通じて、言語や文化に対する理解を深め、他者を尊重し、コミュニケーションを図ろうとする態度や、情報や考えなどを的確に理解したり適切に伝え合ったりする能力が求められている。中でも、東京都英語教育戦略会議においては、英語によるコミュニケーション能力は、次代を担う日本人に求められる重要な能力の一つであると述べられている。しかし、高校3年生を対象とした「平成26・27年度 英語教育改善のための英語力調査（文部科学省）」の結果によると、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」「書くこと」の4技能全てに課題があり、「英語が好きではない」との回答は半数を上回っていた。「英語が好きではない」との回答は、特に基礎的・基本的な学習内容が身に付いていない生徒に顕著であり、学習意欲の向上が求められる結果であった。

所属校はチャレンジスクールであり、不登校、中途退学等多様な経験のある生徒が、自分の目標を見付け、チャレンジするための学校である。生徒の傾向として、中学校までの学習内容の習得に課題があることから、基礎的・基本的な学習に課題のある生徒の多くが「英語が好きではない」と答えた傾向が所属校生徒にも当てはまると推察される。

そこで、本研究では、「英語が好きではない」原因を探り、他者と関わりのある活動を通して、「分かった」という喜びや、英語を「使うことができた」という達成感を実感させることで、生徒の学習意欲の向上を図ることをねらいとし、学習指導の工夫と教材開発を行う。

第2 研究仮説

他者と関わりのある学習形態の中で、活動の内容や、言語材料を活用しやすくするなどの工夫を行うことにより、生徒たちに「分かった」という喜びや、英語を「使うことができた」という達成感を実感させることができれば、生徒たちの学習意欲が向上するだろう。
--

第3 研究の内容と方法

1 基礎研究

学習意欲に関する文献等を収集し、生徒の学習意欲の向上を目指した指導の工夫について考察した。「学習意欲に関する調査研究」（国立教育政策研究所）や「教科基礎調査研究」（東京都教職員研修センター紀要第12号）では、学習内容が「分かる」、「面白い」、と実感できるときや、「英語が使えるようになった」等の達成感を実感できるときに生徒の学習意欲が高まると示されている。また、授業内の「よい友人関係」や「教員の褒め言葉や励まし」、「学習ノートに返事を書くこと」等も効果が大きいとされている。

2 調査研究

所属校生徒の全体の傾向を把握するために、所属校1年次生徒に英語学習に対する意識調査を実施し、164名から回答を得た。また、都立チャレンジスクールにおける英語の学習指導の実態を把握するために、英語教員を対象に意識・実態調査を行い、5校26名から回答を得るとともに、インタビューを他教科も含めた3名の教員に対して行った。

(1) 検証授業前の生徒の意識調査（平成 28 年 7 月実施）

意識調査の結果では、「英語の学習が好きかどうか」という質問に対して、否定的回答が半数を上回った。後述の検証授業を行った二つのグループの生徒の回答も、この傾向と同じであった。否定的回答の理由には、「英語でコミュニケーションをとることへの苦手意識」や「言語材料の習得や英語学習に楽しさが感じられない」という項目が多く挙げられた。また、約 9 割の生徒が「英語力に自信がない」と回答しており、英語の基礎学力への不安が表れていた。さらに、全ての技能において自信がないという回答が非常に多く、特に「話すこと」への苦手意識が高かった。これらの結果から、所属校生徒の英語の学習意欲の向上には、基礎学力や英語で他者とコミュニケーションをとることへの自信を付けさせることが効果的であると考えられる。

(2) 教員対象の調査

ア チャレンジスクールでの英語の学習指導

英語でコミュニケーションをとることにつながる、他者と関わりのある学習指導に関する取組や課題を把握するために、調査を行った。その結果、他者と関わりのある活動に「生徒たちに活気が出る」「生徒同士が学び合うことで理解が深まる」等の肯定的な考えが多い中、ペアワークなどの他者と関わりのある活動にまで至らないという現状も挙げられた。その理由として、生徒の基礎学力に課題があり、知識の定着を狙いとした筆記による反復練習等に時間がかかること、生徒の学力差が大きいこと、他者と関わることに課題があることが挙げられた。しかし、授業改善に向けチャレンジスクールの生徒たちの実態や課題を考慮に入れた、他者と関わりのある活動の具体的な指導法や活動例、手だてなどをもっと知りたいとの意見が 9 割以上あったことから、実践例等の充実を図ることとした。

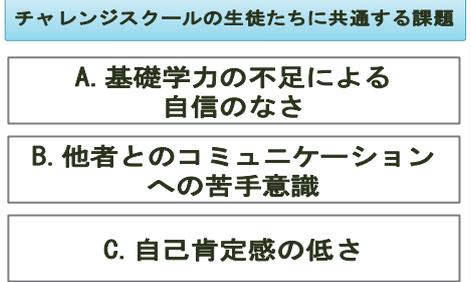


図 1 チャレンジスクールに共通する課題

イ チャレンジスクールに共通する生徒の傾向

チャレンジスクール 2 校に所属経験がある教員 3 名に、チャレンジスクールに共通する生徒の傾向や課題等についてインタビューを行った結果、共通する課題は図 1 の 3 点であった。

生徒や教員への調査から、英語の学習や他者との関わりにおいて、生徒が喜びや、達成感を実感することができれば、英語学習や他者とのコミュニケーションへの意識が肯定的になり、学習意欲の向上につながるのではないかと考えた。

3 開発研究と有効性の検証

以上の調査等を踏まえ、生徒の学習意欲の向上を目指し、五つの手だてを用いて検証授業(全 12 時間)を行い、その有効性について検証した(図 2)。

- ・科目：コミュニケーション英語 I
- ・対象：所属校 1 年次生徒

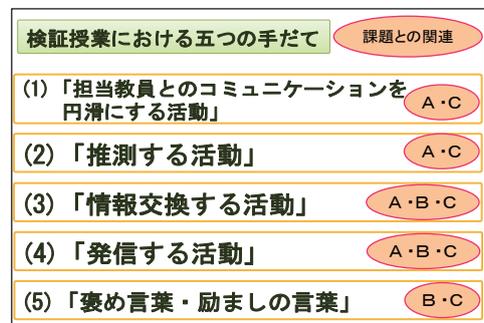


図 2 検証授業における五つの手だて

(1) 「担当教員とのコミュニケーションを円滑にする活動」

前述の調査や所属校での経験から、チャレンジスクールの生徒たちは、他者との関わりに苦手意識がある場合が多く、生徒同士だけでなく教員との関わりも、授業を円滑に進める上で大変重要な要素になる。基礎研究なども踏まえ、生徒と教員との関係性の構築も大切にし、授業

を行った。最初の検証授業では、教員が英語の自己紹介をクイズ形式で行い、生徒が4～5名のグループで予想し回答するという活動を行った。グループ活動を行うことにより、生徒の緊張がほぐれ英語で回答しやすくなり、教員と生徒が英語でコミュニケーションを取る土台を形成することができた。また、生徒が厚紙で作成し机の上に置いているName Cardを教員とのコミュニケーションの手段として活用した。授業の冒頭に教員が出題する「週末の予定」等の日常生活に関する質問への回答を、生徒がName Cardの裏に書き込み教員に提出し、教員がコメント等を書き込んで返却する活動を単元を通して行った。教室では自信をもって発言できない生徒も自分の興味・関心に基づいて自由に記述していた。

(2) 「推測する活動」

基礎学力に自信のない生徒に自信を付けさせる工夫の一つとして、生徒が主体的に学習できるよう、「推測し、考え、気付く」という学習場面を設定した。生徒は学習内容について、新たに学ぶことと、既習の知識・経験に関連付けながら推測し考えることで、理解を深めていく。例えばある文法の文構造を学ぶ際に、他の文法事項を含む文と比較させるなど、生徒たちが既習事項を用いて他者と意見交換をしながら一緒に推測し、自ら文構造に気付くことで、「分かった」と実感することができるよう学習場面や教材の工夫を行った(図3)。

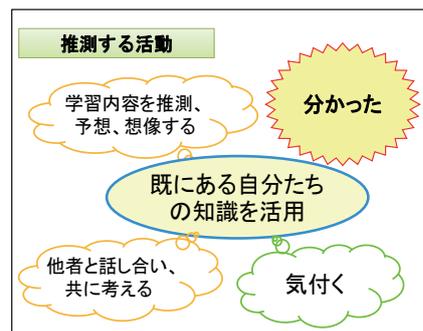


図3 「推測する活動」

(3) 「情報交換をする活動」

生徒が他者と「情報交換」をする必然性のある場面を設定し、他者と「情報交換」をすることで課題解決につながる活動に取り組ませた(図4)。所属校教員へのインタビュー教材を作成するなど、生徒の興味・関心に沿う内容や身近な内容となるよう工夫した。生徒は、休み時間にも自発的に活動するなど、意欲的に取り組んでいた。また、英語に自信のない生徒が活動に安心して取り組むことができるよう、「対話文の型」や、相手を肯定しながら「自分の意見を伝えるフレーズ」を示す等、教材の工夫を行った。

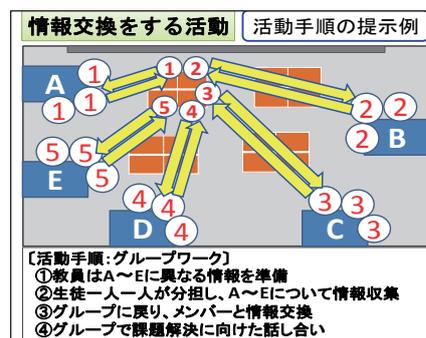


図4 「情報交換をする活動」の手順

(4) 「発信する活動」

生徒たちが、互いの夢について英語でインタビューをし、英語で答えるという活動を行った。事前に配布する評価カードで示す目標数を絞ることで「何ができるようになればよいか」が分かりやすくなるよう示した(図5)。評価は自己評価と相互評価で行った。生徒の振り返りシートによると、「目標が分かりやすかった」という肯定的回答は9割を超え、「インタビューに英語で答えたり、他者が英語で言っていることを理解したりすることができ、達成感が得られた」という肯定的回答は8割を超えた。

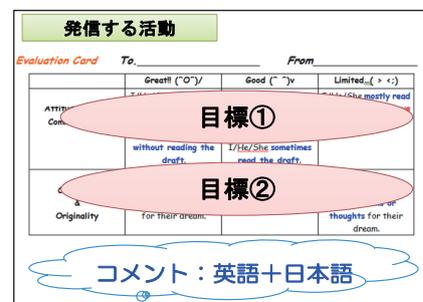


図5 「発信する活動」の評価カード

(5) 「褒め言葉・励ましの言葉」

単元を通して、生徒たちが他者と関わりのある活動で褒め言葉や励ましの言葉を使用するこ

とができるよう、“Nice work!”、“Keep it up!”、“I like your idea!”等の「褒め言葉・励ましの言葉リスト」を作成し配布した。活動の際には、これらの言葉を使用する場面を意図的に設定し、他者との良好な関係構築や学習の雰囲気作りを行った。「発信する活動」で使用した評価カードには、生徒同士で英語の褒め言葉を用いたコメントを書き、英語での表現が難しい内容については日本語でのコメントも付け加え、互いに具体的な評価を行った（図5）。

4 検証授業結果

図6は、生徒の振り返りシートから3(2)～(5)の手だての有効性と意欲の関連性を示したものである。各手だては振り返りシートの自己評価を4点満点で集計した。第3回の値が他の回と比べて低い原因は、教員が手だてを十分にとることができなかつたためと考えられる。しかし、検証授業全体を通して、「意欲的に取り組めた」、「英語の学習を楽しめた」という回答は毎回ほぼ9割を超え、各手だてへの肯定的回答も第3回の「褒め言葉・励ましの言葉」を除きほぼ8割を超えており、各手だてによって学習意欲が向上するという関連性があると考えられる。

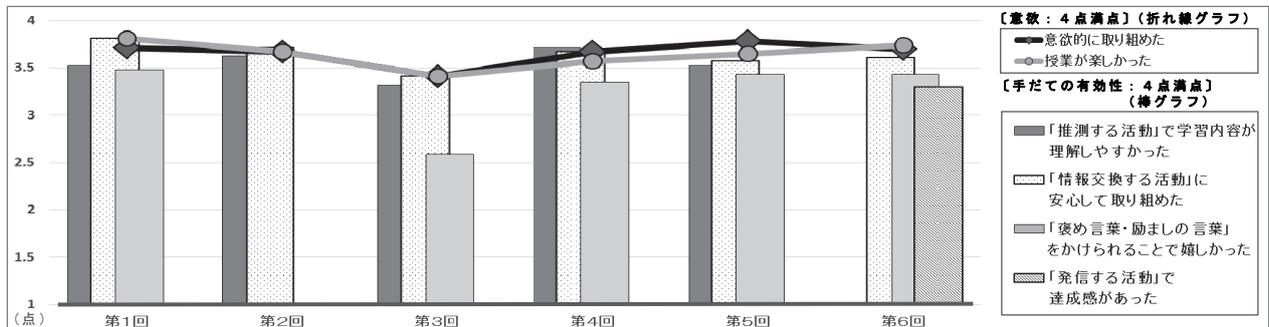


図6 学習に対する意識と手だての関係（振り返りシート集計結果）

5 生徒の英語学習に関する検証授業事前・事後の意識の変容

「英語の学習が好きだ」という設問に対する肯定的回答の割合は上昇し、特に、「あてはまる」という回答の増加は顕著である。また、他者と関わる活動への肯定的回答も73.9%であった（図7）。さらに、事後アンケートのみの質問項目であった「今後も他者と関わりのある活動を行いたい」に対する肯定的回答は78%、他者と関わりのある活動の良さを問う質問への肯定的回答は、「学習の理解が進む」91%、「英語を実際に使用することで達成感がある」87%、「楽しい」83%、「主体的になる」74%であった。

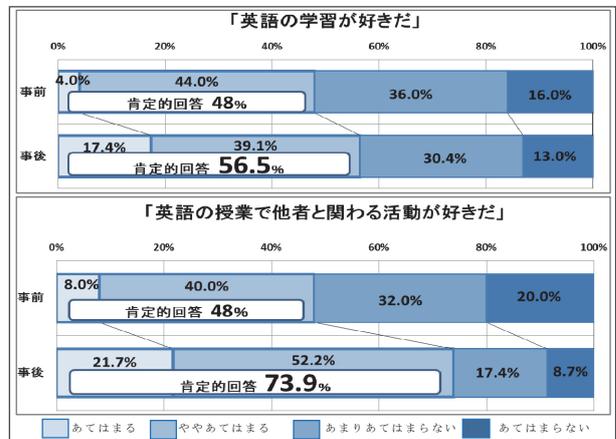


図7 検証授業事前・事後

第4 研究の成果

前述の検証授業結果や生徒の意識の変容結果から、今回の研究で講じた手だては、生徒が他者と関わる活動に取り組み易くなることや、英語の学習を肯定的に捉えることができ、学習意欲の向上につなげることができたと言える。

第5 今後の課題

所属校の現状や、生徒、教員の意識調査結果を踏まえ、他者と関わりのある学習指導の更なる充実を目指すとともに、基礎的・基本的な学習内容の定着から、知識技能を活用した応用的な内容へと発展させる指導の工夫を継続して研究していく。